

日本転倒予防学会 第9回学術集会

現地+
WEB開催

転倒予防の未来を「かたち」にする

2022年10月15日～16日 パシフィコ横浜 会議センター



秋の心地よい天候のなか、日本転倒予防学会第9回学術集会が横浜で開催されました。各地域で転倒予防に勤しむ多職種が集まって交流と議論を展開し、転倒予防の「未来」が「かたち」づくられていきました。その講演の一部を紹介します。(編集部)

転倒をきたす特発性正常圧水頭症

大会長講演「私が目指す『転倒予防』の道」で、鮫島直之氏（東京共済病院脳神経外科）は、自身の2つの目標を掲げました。一つは転倒の原因に「特発性正常圧水頭症（iNPH）」があることを広く知らしめること、もう一つは病院内の転倒予防チームの育成です。

東京共済病院には正常圧水頭症センターがあり、iNPH治療を専門的に行っています。iNPHは歩行障害、認知障害、尿失禁をきたす高齢者に多くみられる疾患で、高齢者の転倒の背景にこの疾患が隠れていることがあります。

鮫島氏は、iNPH患者の歩行障害の特徴には、小刻み歩行・外股歩行・すり足歩行・不安定な歩行（特に転回時）と、第一歩が出ない、突進現象、立ち上がれないなどがあり、その結果、転倒が多くなると報告しました。そして、iNPH患者391例のうち333例（85%）に転倒の既往があり、そのうち4例に1例は骨折の既往もあったこと、また、転倒場所は屋内より屋外が多いという特徴を挙げました。さらに、臨床現場ではパーキンソン病よりも転倒例が多いという印象もあると述べました。

iNPHの治療では、シャント手術によって頭蓋内に溜まった脳脊髄液を体内の別の場所に流す方法がとられます。シャント手術の一つ、LPシャントは日本で初めて行われた腰椎くも膜下腔と腹腔をチューブで繋ぐ手術で、合併症が少ない治療として

注目度が高く、鮫島氏は国内はもとより、国際学会でもiNPHと転倒の関係やLPシャントについて引き続き積極的に発信していきたいとしました。

そして、2つめの目標、転倒予防チームの育成にあたっては、「必要以上の行動制限は本来の能力を損なうことにもなり、長期的には患者の幸せにはつながらない」ことを大原則として、「転倒リスクを最小としながら活動を上げるための行動を支援すること」を目的とすると鮫島氏は述べました。そして、多職種で構成されるチームの効果を高めるためには、スタッフ自体もエンパワーメントされる必要があるとし、転倒予防チームを育てて転倒予防のカルチャーを広げていきたいと述べました。



転倒予防文化を育む（鮫島氏）

AIで転倒リスク、健康寿命を予測

最新のテクノロジーを駆使した転倒予防の取り組みは、現在どこまで進んでいるのでしょうか。シンポジウム1「AI・テクノロジーと転倒予防」では、企業の研究者からの興味深い発表がありました。

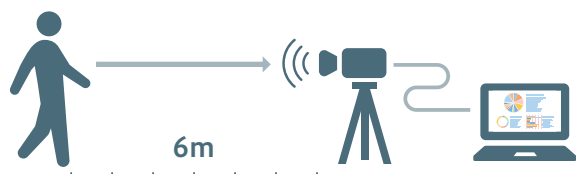
FRONTEOの豊柴博義氏は、自然言語処理を使用した転倒転落予測AIシステム「Coroban®（ころばん）」を紹介。これは、AIが電子カルテの看護記

録を解析して入院患者ごとに転倒転落リスクを毎日自動的に評価することで、事前の対策ができるようになるというシステムです。看護師の業務負担を増やすことなく、転倒転落数の減少と業務の効率化・均てん化を図ることを目的に構築されました。

実際に導入した施設では転倒転落数が減少しており、Coroban®の予測精度は看護師によるアセスメントシートと同等以上と考えられ、「転倒の重症度も考慮した管理が期待できる」と豊柴氏は報告しました。

次に、NECソリューションイノベータの永井克幸氏は、非接触で体の動きを数値として捉える3Dセンサを発表。このシステムは、マーカーなどを身に付けずに3Dセンサに向かって約6メートルの距離を普段どおりに歩くだけで、全身の歩行姿勢を測定・評価できるものです。測定結果は蓄積できるので、指導・トレーニング効果を把握して今後のトレーニング計画にも活かすことができます。すでに、自治体やショッピングセンターなどで活用されており、永井氏は「低コストで高品質な健康指導で人々の健康に寄与したい」と抱負を述べました。

続いて、この3Dセンサが採用した歩行姿勢評価基準について、アシックススポーツ工学研究所の市川将氏が説明を行いました。システム開発にあたっては、歩行の際の頭の横ズレや振れ幅、腰の曲がり度合い、つま先の上がりや左右差など、計26種類の検証ポイントを44項目にわたって検証し、妥当性が確認できた20種類36項目を採用しました。このシステムは3Dセンサのほかに、転倒・疼痛リスクを判定して将来の健康寿命を予測する企業向けの健康増進プログラムなどにも活用されていることも報告されました。



3Dセンサのイメージ

活動の継続が転倒予防の「みらい」をつくる

学術集会の最後は、本学会の前身である転倒予防医学研究会を立ち上げ、学会の初代理事長を務めた武藤芳照氏（東京健康リハビリテーション総合研究所）の講演「転倒予防の道を拓く」で締めくくられました。

水泳選手だった武藤氏はスポーツドクターを目指して五輪の水泳チームのドクターとなり、一方では転倒予防・介護予防の普及・啓発に取り組みました。武藤氏は、「転倒予防伝道師」としてのこれまでの活動を振り返り、「転倒だけを防げばいいのではなく、健康な社会づくりに照準を定めている」「人生は縁と運、そして恩。転倒予防で生まれた縁と運を大切に」と述べました。そして現在は、新しい道として舞台芸術家にみられる傷病を対象にした「舞台医学」を研究していること、2024年には日本舞台医学会が創設される予定があることを報告しました。

学術集会ではほかに、福岡ソフトバンクホークス前監督の工藤公康氏による市民公開講座や、転倒予防指導士の「みらい」を考えるワークショップも行われました。ワークショップでは、転倒予防活動に励む多職種のメディカルスタッフが集まり、コロナ禍による影響や活動の悩み、今後の展望が語られ、共有されました。座長の奥泉宏康氏（上田市武石診療所）は、学会から転倒予防指導士に向けて資料や月報などの提供を検討していると述べ、「転倒予防活動を継続していくことが、転倒予防指導士のみらいをつくることにつながる」とまとめました。閉会式では、大会長の鮫島氏が、コロナ禍で現地参加者が減っていた学術集会に再び活気が戻ったことを喜び、「引き続き転倒予防の活動を盛り上げていきましょう」と締めくくりました。2023年の第10回となる学術集会は京都で行われる予定です。🎯



人生は縁と運、そして恩（武藤氏）